

私の名前は一条凛。年齢は〇四歳。都内の〇学校に通う三年生で、生徒会長をつとめています。正義感は強い方なので、生徒達が安心して生活できる〇学校を目指して、日々活動しています。そんな、どこにでもいるような、ごく普通の〇学生である私ですが、先日、とんでもない事件に巻き込まれてしまいました。



【女子】「生徒会長おはよう！ お腹の病気で入院なんて大変だったね。体の調子はどう？」

【凛】「おはよう。うん、もう大丈夫。ありがとう」

私はお腹の病気で入院した事になっており、しばらく学校を休んでいました。しかし、私が入院した理由は、お腹の病気なんかではありません。この学校の女子生徒をナンパする暴走族を注意した際、彼らに拉致され、徹底的にレイプされたからです。



暴走族は、学校の生徒を人質に取り、私を脅迫してレイプしました。  
そして、その様子を撮影し、アングラサイトで生放送されました。



翌日、その放送を見ていた校長先生に脅され、  
校長先生に呼び出されてレイプされてしまいました。





それ以降も、暴走族は私の体を玩具にしました。  
暴走族は生放送しながら、私の膣をクスコで広げ、  
子宮口を無理やりごじ開けました。

そして校長先生が、広がった私の子宮内部に、  
プールに大量にいたナメクジを詰め込みました。





そんなナメクジだらけの子宮内部を、  
暴走族は薄汚れたトイレブラシで  
かき回しました。

そして、最後のとどめとばかりに、  
子宮に金属バットをねじ込んで、  
私の子宮口をガバガバにしたのです。







【凛】「う……はあ……はあ……」

しかし、それほど酷いレイプをされたにも関わらず、その時の事を思い出すと、子宮が熱くなり、体が火照り、愛液が垂れおちてしまいます。下半身がすぐに火照るようになったため、退院してからはずっとノーパンで過ごします。

【女子】「ちよ、ちよっと……大丈夫？」

【凛】「あ、うん……大丈夫……」

【女子】「退院してすぐなんだから、無理しちゃダメだよ？」

女子は私が腹痛か何かで苦しんでいると勘違いし、優しい言葉をかけてくれました。

しかし、本当はレイプされた事を思い出して興奮していたと知ったら、どういう反応をするのでしょうか。私はドキドキしながら、興奮した体を何とかするために、屋外トイレへと向かいました。





【凜】「誰も居ないよね…」

校舎裏手にある屋外トイレは、校舎建て替え前の古い作りのトイレであるため、今では使う人がほとんどおらず、掃除も行き届いていません。非常に汚く、ツーンとした匂いが漂ってきます。

【凜】「…こんな場所じゃないと、人の出入りが激しくて見つかったらやらね…」

私は全ての個室に誰も居ない事を確認しました。こんな薄汚れたトイレをわざわざ使う生徒もいませんが、念のためです。

【凜】「急がなきゃ…。生徒会長が遅刻とか、示しがつかないからね」

私はそう呟き、「一番奥の個室へ入って、便器に腰掛けました。」





【凛】「んっ…」

私はトイレに腰掛けるなり、濡れた割れ目に指を伸ばします。そのまま割れ目を左右に開き、丁寧に愛撫していきます。

【凛】「…んっ…普通のオナニーじゃ、やっぱり物足りないかな…」

暴走族に集団レイプされ、校長に学校内でも犯され、子宮口を広げられ、ナメクジやトイレブラシを入れられ、金属バットで子宮口をガバガバにされた私にとっては、指でのオナニーなど、ぬるくてとても興奮できません。もっとキツイ道具で、子宮口を突き抜け、子宮の奥までかき回したい。私はそう考え、個室に入る前に用意していた道具を取り出しました。





【凛】「…これなら奥まで届くよねっ…」

私が持ってきたのは、このトイレの掃除道具入れにあったトイレブラシです。  
薄汚いトイレブラシをいっへ、おそろく年単位の汚れがこびり付いています。

【凛】「これ…あの時のブラシより汚いかも…」

ブラシは汚物によって、全体的に茶色に変色しており、

その一部は腐敗した緑色に染まっており、

アンモニア、大便、その他腐った匂いが入り混じっています。

こんな物でオナニーするなんて、ましてや膣や子宮に入れるなど、

普通では考えられません。

しかし私は興奮し、これで子宮をかき回したくてたまらなくなっていました。



